

『田舎教師』の考察

—— 死者に寄り添う花袋の無常と近代 ——

伊 狩 弘

1

『田舎教師』は明治四十二年十月に佐久良書房から一円六十銭で刊行された、書下ろしの長篇小説である。表題紙の次の頁には「この書を太田玉茗氏に呈す」という献辞が記され、次には中田遊郭の帰り路に利根川べりの麦倉河岸でくつろぐ青年の口絵（岡田三郎助）、その次に館林、弥勒、羽生を中心にした地図が挿入されている。地図について花袋は「巻頭に入れた地図は、足利で生れ、熊谷、行田、弥勒、羽生、この狭い間にしか概してその足跡が到らなかつた青年の一生といふことを思はせたいと思つて挿んだのであつた。」と『東京の三十年』の中で書いている。しかしこうした本の体裁は約三年前に出版された『破戒』が、見開きの次の頁に「緑蔭叢書は藤村の著作を刊行するものにて、一年一冊もしくは二年一冊、成るに随ひ篇を重ねるの豫定なり。されば世にある多くの叢書に比べて、多少其性質を異にするもの。紙数の如き毎篇必ずしも一定し難しといへども、板本の素質はすべて読者のために親切ならむことを旨とする。」という緑蔭叢書の公約文を入れ、次の頁に鐫木清方の挿絵、これは瀬川丑松が風間敬之進の後妻らの野良仕事を眺めている有様、この挿絵の左側の頁は表題紙になつていて、「この書の世に出づるにいたりたるは、函館にある秦慶治氏、及び信濃にある神津猛氏のたまものなり。勞作終るの日にあたりて、このものがたりを二人の恩人のまへにさぐぐ。」という献辞があり、更に頁一枚於て鐫木清方の挿絵、住職の邪心に人知れず苦しむお志保を省吾が心配している様子、がある。そして『破戒』は第六章と七章の間に「千曲川流域之図」が挿入されている。こうして見ると『破戒』

に遅れること三年余り、『田舎教師』を刊行する花袋に、『破戒』に対する意識がかなり強くあつたと見られる。そして藤村はもう一作、『田舎教師』の出来る前年の明治四十一年十月に『春』という青年群像小説を刊行していた。『春』は『文学界』創刊の頃の同人の交友から、岸本捨吉の放浪、失恋、青木駿一つまり透谷の死と安井（麻生）勝子こと佐藤輔子の死を挟んで捨吉の仙台行きまでが語られ、内容は藤村の青春挽歌であるが、小説を書いた藤村の心底は青春回復、青春回帰であつたとも言える。『田舎教師』は小学校教師を主人公にした学校小説という点で言えば『破戒』と似ており、青春群像や一群の友人の別れを書いた点では『春』に似た面も大きい。岸本捨吉は青木の死後、いつまでも青木路線に固執し、耽美芸術路線に転向し、それぞれ現実社会に適應していく他の同人、菅、市川らそして新同人の福富（上田敏）路線とはだんだん遠ざかつてしまう。そして池の端での訣別に至つてそれは決定的になつた。そのような青春挽歌は『田舎教師』でも一定見られる。また失意落魄する若者の様子という点は両作に共通し、場面設定や叙述なども幾分似通うところがある。¹⁾

一つの例として挙げると『春』の後半、岸本捨吉は青木と安井勝子の死によつて痛手を負い、自分の行く道を見失ひ、陶器の画工に落ちぶれてもいいとまで思ひつめる。が、それもならず、『——自分は今、眼に見えない牢獄らうごくの中に居る。鍛冶橋監獄に居る兄さんの為には、彼程あれほど他が大騒ぎしても、自分が苦んで居るを見て呉れる者が無い。あゝ病人は寧ろ幸福だ——身体ぢやうぶの頑健けんなものはそこへ倒れるまで誰も知らずに居る。』²⁾と思ひ、獄中の兄（長兄秀雄）や不具の兄（三兄友弥）の身に比べて自分を哀れに思ひ次の様な行動をとる。

到頭岸本は斯ういふことを考へるやうになつた。七月の下旬、ぶらりと大根島の家を出て行かうとする頃の彼は、最早何事なんじも為る氣の無い人であつた。（中略）

家を出て岸本は湯島の天神の方へ歩いて行つた。彼は錢取に出掛けるでもなく、職業を見つけない行くでもなく、友達を訪ねに行くでもなかつた。時々彼は往來の片隅に佇立んで、通る人をボンヤリ眺めたり、白い日を見て震へたりした。天神の境内にある口ハ台は、斯ういふ岸本が腰を掛けて考へるに好い場所であつた。そこには手拭で頭を包み、胸を露出あらはし、昼寐の夢を食つて居る人々がある。岸本も桜の葉の蔭を択んで、清すしい風の来る、日の光の

チラ／＼するやうなところへ倚凭りながら眺めた。

このように岸本捨吉は明治二十九年の夏、途方に暮れて湯島天神のロハ台に休んだ。一方林清三は明治三十六年九月、清三は上京して上野の東京音楽学校を受験した。しかし結果は惨めなものだった。そこで清三は上野公園のロハ台で茫然として休んだのである。

講演のロハ台は樹の影で涼しかった。風がをり／＼心地よく吹いて通つた。かれは心を静めるために其処に横になつた。向うには縁台に赤い毛布けつとを敷いたのがいくつとなく並んで、赤い襷で綾取つた若い女のメリンスの帯が見える。中年増の姿もくつきりと見える。赤い地に氷といふ字を白く抜いた旗がチラチラする。(中略)

竹の台に来て、かれはまた三たびロハ台に腰をかけた。

眼下に横つて居る大都会、薨が薨に続いて、烟突からは黒い凄しい烟が颯あがつてゐるのが見える。彼方あちこちから起る物音が一つになつて何だかそれが大都会の凄しい叫びのやうに思はれる。此処に罪惡もあれば事業もある。功名もあれば富貴もある。飢餓もあれば絶望もある。新聞紙上に毎日のやうに顕はれて来る三面事故のことなども胸に上つた。(三十七章)

右のように明治中期には、日本の中心である東京は学歴や出世競争から落伍した青年が蟠踞する所になり、落伍青年の居場所の一つはロハ台という金も力もない者の安息の場所であつたやうだ。上野のロハ台から眺める活動的な東京という場は清三には無縁な別世界であり、岸本捨吉には幻滅しか齎さない空間であつた。だから清三は羽生弥勒に埋もれて、岸本は仙台に隠アジールれ場を求めて都落ちする。

しかし田舎が清潔で禁欲的であるかという点、むしろ逆であることも田舎暮らしが長くなるにつれ清三にも分つていた。二十九章の明治三十五年頃の清三の感懐として「田舎は存外猥褻で淫靡で不潔であることも解つて来た。」とある。その直前の叙述として、様々な田舎の醜聞や事件が列举され、また手古林(単行本挿入地図には手子林とある)の火事に關して清三の思いが述べられる。

ある夜、学校の前の半鐘が烈しく鳴つた。竹藪の向うに出て見ると、空がぼんやりと赤くなつて居る。やがて

その火事は手古林であつたことが解つた。(中略) かれは平和な田舎に忽然とした起つた事件を考へながら歩いた。一夜の不意の出来事の爲めに、一家の運命に大きな頓挫を来すべきことなどを思ひ遣らぬ訳には行かなかつた。金銭の貴い田舎では、新に一軒の家屋を建てる爲めにもある個人の一生を烈しい労働に費さねばならぬのである。かれは唯々功名に熱し學問に熱して居た熊谷や行田の友人達をかうしたハアドライフを送る人々に比べて考へて見た。続いて日毎に新聞紙上に顕はれる豪い人々のライフをも描いて見た。豪い人にはそれはなりたい。立派な生活は送りたい。しかし平凡に生活して居る人はいくらもある。一家の幸福——弱い母の幸福を犠牲にしてまでも、功名に赴かなくつてはならぬこともない。寧ろ自分は平凡なる生活に甘んずる。かう考へながらかれは歩いた。

右引用に見られる清三の平凡志向は功名の志と表裏一体のものであるが、作中のさまざまの人の生活実態の精緻な觀察とともに生れてゐることを注意すべきだろう。無論それらの殆どは花袋の觀察だろうが、たとえば「寒い日に体を泥の中に突刺して凍え死んだ爺」の喜平は「村はづれの小屋に住んで居る五十ばかりの爺おやぢで、雑魚や鰯さばを捕とらへては、それを売つて、其日其日の口をぬらして居た。毎日のやうに汚い風をして、古い繕つた網かを担いで、川やら堀切やらに出かけて行つた。」という。つまり村の余計者、自作農でも小作でもない村の寄生者のような爺さんである。ところが喜平は寒い日に堀切の泥水に足を取られたかして、凍死した。『そら、あの西の勘三さんの田ん中の堀切でござねて(單行本は「死しねて」居たんだつてよ。』というやうに、村人に通用していたらしい「こねる(御涅槃)」を活用させた俗語」という言葉で語られる。こうした觀察や聞き取りは随所に見られ、この小説を明治中期の地方農村の実写たらしめてゐるわけだが、こうした田舎生活の悲惨悲哀は、清三の願う平凡の内実が決して明るい豊かなものでないことを暗示してゐるのである。

小林一郎の調査に基づく地図では弥勒高等小学校前の街道を羽生方面へ向かつた辺りにはだるま屋が三軒あつたのであり、田舎が都会以上に猥雑不潔であることは、花袋の他の小説に描かれる通りであらう。

こうしてみると花袋が『田舎教師』執筆に際し『破戒』と同時に『春』の岸本捨吉の失意絶望をもある程度念頭に置いたことは間違ひあるまい。両作の扱う時代は約十年隔たつてゐる。『春』は日清戦争の直前の頃から透谷の死を経て

明治二十九年九月までの約三年間を辿っている。下関条約の後の三国干渉の屈辱があつて日本は所謂臥薪嘗胆の十年に入つたわけだが、『春』が日清戦争を跨いだ時間を追つてゐるのに対し、『田舎教師』は日露戦争の少し前、明治三十四年春から激戦の最中の遼陽陥落の知らせを聞いた清三が『母さん！ 遼陽が取れた！』と言ふあたりまで、即ち明治三十七年の九月初めまでということになる。『破戒』は、明治三十八年秋を想定して書かれてゐるので日露戦争に関連する叙述はない。このように『春』と『田舎教師』は、それぞれの状況は異なるものの日清・日露戦争の頃の青春群像という点で共通し、しかも失意の青年を描くと言う点、近似するものがある。ただ『春』は藤村自身の青春の彷徨をモデルとし、地方から東京に流亡落魄する旧家一族の頹廢を背景にしており、さらに捨吉は透谷と輔子の死を見据えながら生きて行く。『どうかして生きたい』という生への執着を根本的契機にしているのに対し、林清三こと小林秀三の場合は、同じように失意の人ではあるが二十歳そこそこで死んだ者の失意でありそれより先の展望はあり得ない。花袋は文学的には詩人から出発して後に自然主義文学の作家となつた、文学的達成の面では同質な点が多いのであるけれども、文学に向かう態度から見るとかなり違いがある。すなわち藤村の場合はあくまで内向きに自己の内面の真実に依拠しようとし、花袋は社会的事実を作品の基礎に据えてそれを花袋流の人生観に融合させようとする、そうした点で二人はかなりの差があると言える。しかしその小説は『田舎教師』と『破戒』『春』『生』『妻』『縁』と『家』『時は過ぎ行く』と『夜明け前』など、内容が類似する小説が多々見られる。それらを総合的に見ると、要するに日本の近代を生きる人々の様々の苦悩と悲哀ということになる。そこで『田舎教師』という関東平野北部、熊谷、行田、羽生、弥勒一带を隈なく描いたこの小説を眺めると、明治中期の日本の動きが、花袋の目を通して見た小林秀三の生活と心、そこに重なる東京と地方の差異や人情と共に極めて立体的にそして歴史的に構成されてくる。大きな歴史の時空の中に花袋と小林秀三の小時空が重なつて、流れて行く様が見えてくる。本稿においては、『田舎教師』を読むことを通して明治の近代という日本民衆の生活に江戸時代とは大きな非連続を齎した時代の動きと、にもかかわらず連続と続く民衆の生活の連続という観点から考え、花袋の視座、立脚点をも考究し、出来れば花袋・藤村の時代と人間への視点の違いをも考え

ることにはしたい。明治時代は聖代といった言い方をされる、要するに有難い天子様の統治する有難い時代という意味であろう。徳川幕府を中心にした武士が支配した時代が終わって、王政復古の世の中となった。しかし古代への復帰とは名ばかりで、実は西欧社会の仕組みも考え方も急激且つ無差別に取り入れた結果、世の中の調和を大きく損ない歪めた。『浮雲』を祖とする明治文学は概してそうした不調和の反映であると言ってもよいだろう。『田舎教師』は明治五年の学制発布以後、日本の子供や青年を導き希望を齎したが、他方では学歴による差別化を助長し抑圧装置化した学校制度の底辺に位置する教員の生活と心情を、北関東の暮しや自然と合わせて小説化したもので、熊谷中学を卒業し、もう一階梯昇れば社会の上層に近づける青年が家庭に恵まれぬせいで逆に下層社会に転落するこの世の皮肉を坦々と描き出したところが、『田舎教師』という言葉に不滅の含蓄を与えた花袋の功績なのであった。

2

『田舎教師』は埼玉県北部の熊谷、行田、羽生、弥勒、そして現在は加須市に合併した大利根町の中田まで、利根川の南側一帯を舞台にした小説で、周知の如く主人公林清三は実在の小学校教員小林秀三がモデルである。この二十歳を過ぎたばかりで病死した小林秀三の日記を元にして、ほぼ実在の人物と、中田遊郭の一件以外は概ね実際の出来事を描いた小説である。その描写と叙述は丹念に清三こと秀三の行動を追うように、弥勒や羽生の自然や人々の生活を清三の歩行する目や耳から見たり聞いたりするように書いた。勿論その大部分は花袋の实地調査の結果であろうが、それ以外にも紀行文家花袋の本領であるとは言え、その地域の様子が非常に鮮明に浮かんでくる。一つ例に取れば、清三は月給十一円の教員になるため明治三十四年四月二十五日に井泉村役場(弥勒の西方約二キロメートル)を訪ね、そこで指示された三田ヶ谷村(弥勒)役場に行き、学校にも寄り、役場に泊った。翌日二十六日金曜日は「学校の予算表の筆記を頼まれて、役場で一日を暮した。」のである。その晩には弥勒尋常高等小学校の校長の家を訪れ、『明日は土曜日ですから、日曜にかけて一度行田に帰って来たいと思ひますが、お差支はないでせうか?』と訊くと校長は『ようござんすとも…』

…それでは来週から勤めて戴くやうに……』と言ったために清三は二十六日は役場の小使室に泊り、翌朝行田に向かったのである。このような経緯で清三は明治三十四年四月二十七日土曜日午前八時過ぎに三田ヶ谷村役場を発つて行田の家に帰ったのである。

小川屋の傍の川縁の繁みからは、雨滴^{あまたれ}がはら／＼と傘の上に乱れ落ちた。錆びた黒い水には蟻蚋^{あまたれ}が赤い腹を見せて居る。ふと街道の取つきの家から、小川屋のお種といふ色白娘が、白い手拭で髪を掩つたまゝ、傘もさゝずに、大きな雨滴の落ちる木蔭を急いで此方に遣つて来たが、二三歩前で、清三と顔見合せて、鳥渡会釈して通り過ぎた。学校はまだ授業が始まらぬので、門から下駄箱の見える辺には、生徒の傘がぞろ／＼と続いた。男生徒も女生徒も多くは包を腰の処に負つて尻を擧げて歩いて来る。雨の降る中を濡れそぼちながら、傘を車の輪のやうに地上に廻して来る頑童^{わんどう}もあれば、傘の柄を頸の処で押へて、編棒と毛糸とを動かして歩いて来る十二三の娘もあつた。この生徒等を来週からは自分が教へるのだと思つて、清三は其前を通つた。

右の一節は細かい観察によつて弥勒小学校周辺の四月の朝の様子が描かれる。小川屋は実在した料理屋で、小学校の教員が宴会をしたり、仕出しを届けさせたりした。お種坊と言われるのは小川ネンで明治九年三月に新潟県刈羽郡に生まれ、十二歳のとき、父親が杜氏として招かれたため、一家五人で弥勒に移住した。やがて母親が料理屋を開いた。十五歳で結婚し翌年離婚したので、清三が弥勒高等小学校に勤めたときには、二十五歳という当時としてはいい年で、しかも清三より八つ年上であつた。現在は弥勒の円照寺境内に「お種さん資料館」が建つて当時の暮らしが分るし、墓石も立っている。雨の朝の登校風景もよく観察されている。傘を頸に挟んで毛糸編みをしながら登校する少女は、明治中期になるとこのような田舎でも毛糸編みが広まったことを教える。羽生や弥勒は花袋の郷里館林に近く、また太田玉茗の建福寺は小林秀三が下宿した寺で、花袋は秀三に会つたこともあり、新たに立つた秀三の墓を見て花袋は本作を構想し、度々現地を調査したのであるから当然でもある。

『東京の三十年』（大正6・6、博文館）はよく知られるところだが、花袋は次の様に小説の成立を語っている。

私は戦場から歸つて、間もなく〇君を田舎の寺に訪ねた。その時、墓場を通りぬけやうとして、ふと見ると、新

しい墓標に、『小林秀三之墓』といふ字の書いてあるのが眼に着いた。新仏らしく、花などが一杯にそこに備へてあつた。(中略)

私はその前に一二度逢つたことがあるので、微かながらもその姿を思ひ浮べることが出来た。私は一番先に思つた。『遼陽陥落の日……日本の世界的發展の最も光榮ある日に、万人の狂氣してゐる日に、さうしてさびしく死んで行く青年もあるのだ。事業もせずに、戦場へ兵士となつてさへ行かれずに。』かう思ふと、その青年、田舎に埋れた青年の志と言ふことに就いて、脈々とした哀愁が私の胸を打つた。つづいて、『親々と子供』の中の墓場のシーンが眼に浮んで来た。バザロフとは丸で違つてはゐるけれども……。

私は青年——明治三十四五年から七八年代の日本の青年を調べて書いて見ようと思つた。そして、これを日本の世界發展の光榮ある日に結びつけようと思ひ立つた。ことに、幸ひであつたのは、その小林秀三氏の日記が、中学生時代のもの、小学校教師時代と、死ぬ一年と、かう纏つて○君の手許にあつたことであつた。私は早速それを借りて来て讀んだ。

この日記がなくとも、『田舎教師』は出来たであらうけれども、兎に角その日記が非常に好い材料になつたことは事実であつた。ことに、死一年前の日記が……。

この日記は、或はこの小林君の一生の事業であつたかも知れなかつた。私はその日記の中に、志を抱いて田舎に埋れて行く多くの青年達と、事業を成し得ずに亡びて行くさびしい多くの心とを發見した。私は『田舎教師』の中心をつかみ得たやうな氣がした。(中略)

私は秋の日など、寺の本堂からひろびろとした野を見渡した。黄く色ついた稲、それにさし透つた明るい夕日、何処か遠くを通つて行く車の音、榛の木の疎らな影、それを見ると、其処に小林君がゐて、そして私と同じやうにして矢張、その野の夕日を眺め、荷車の響をきいてゐるやうに思つた。

『悠々たる人生だ。』

かうした嘆声がいつとなく私の口に上るのであつた。

戦場での凄しい砲声、修羅の巷、残忍な死骸、さういふものを見て来た私には、ことにさうした静かな自然の景色がしみぐと染み通つた。その対照が私に非常に深く人生と自然を思はせた。

右のように述懐しているとおり、『田舎教師』の中心は羽生・弥勒の名もない人生と世界的事件との対照といつてよい。さらにこの小説には随所に明治中期の北関東の一地域の様子が活写されていることは驚くべきことである。近代日本の地方の実情、民の貧しい暮らしぶりは漱石や鷗外などの知的エリートたちは注視することも書くこともなかつたもので、その辺りを注意深く観察して書いた所に自然主義作家花袋の真骨頂がある。またこの小説は利根川周辺の野草と植物名がふんだんに取り込まれ、その他の土地の人々の生活の様子と合わせると一種博物誌の様相を呈している。四十六章から四十八章辺りの叙述は、花袋の言によれば、秀三の日記をそのまま引用したようだが、「利根川の土手にはさまゝの花があつた。ある日清三は関さんと大越から発戸までの間を歩いた。清三は一々花の名を手帳につけた。——みつまた、たびらこ、ぢごくのかまのふた、ほとけのぎ、すゞめゑんどう、からすゑんどう、のみのふすま、すみれ、たちつぽすみれ、さんしきすみれ、げんげ、たんぼゝ、いぬがらし、こけりんだう、はこべ、あかじくはこべ、かきどうし、さぎごけ、ふき、なづな、ながばぐさ、しやくなげ、つばき、こゑめざくら、もゝ、ひばけ、ひらぎく、へびいちご、おにだひらこ、はゝこ、きつねのぼたん、そらまめ。」というように沢山の野草などが列挙される。満洲旅順口で凄絶な戦争が続いて軍神広瀬中佐の戦死があつた、その同じ頃に弥勒の野原は春の野草が咲き満ちている。それを清三は写生したり名をメモしたりした。そのような対照的な事柄の配合がこの小説の特長であり、この世の真相に触れようとする花袋のランドスケープでありパスペクティブなのである。少し時間が飛んだので、再び四月二十七日の清三の行田への道すがらを見よう。

井泉村（あいつみむら）の役場（ちやう）に助役を訪ねて見たが、まだ出勤して居なかつた。道に沿つた長い汚い溝には、藻や藺や葦の新芽や沢瀉（あまたれ）（正しくは「沢瀉」であろうが単行本も全集も「瀉」となっている、引用者がごたゝと生えて、淡竹の雨を帯びた藪がその上に蔽ひ冠さつた。雨滴がばらゝ落ちた。

路の畔に軒の傾いた小さな百姓家があつて、壁には鋤や犁（くわ）や古い蓑などがかけてある。髪の毛の乱れた肥つた鼻（くわ）が柱

に凭り懸つて、今年生れた赤児に乳を吞ませて居ると、亭主らしい鬚面の四十男は雨に仕事の出来ぬのを退屈さうに、手を伸して大きな欠をして居た。

鎮守の八幡宮の茅葺の古い社殿は街道から見える処にあつた。華表の傍には社殿修繕の寄附金の姓名と額とが古く新しく並べて書いてある。周囲の櫓の太木にはもう新芽が萌し始めた。賽銭箱の前には、額髪を手拭で巻いた子守が二人、子守唄を調子よく唄つて居た。

昨日の売残りのふかし甘薯が不味さうに並べてある店もあつた。雨は細く糸のやうに其低き軒を掠めた。

畑には漸く芽を出しかけた桑、眼もさめるやうに黄い菜の花、れんげや菫や草の生えて居る畔、遠くに杉や櫓の森に囲まれた豪農の白壁も見える。

青縞を織る音が処々に聞える。チャンカラチャンカラと忙しさうな調子が絶えず響いて来る。時には四辺にそれらしい人家も見えないのに、何処で織つてゐるのだらうと思はせることもある。唄が若々しい調子で聞えて来ることもある。

発戸河岸の方に岐れる路の角には、此処等で評判だといふ鰻鮓屋があつた。朝から大釜には湯が沸つて、主らしい男が、大きなべ板にうどん粉をなすつて、せつせと玉を伸して居た。赤い櫓を懸けた若い女中が馴染らしい百姓と笑つて話して居た。

このように弥勒から羽生に向かう清三の目と耳によつて明治中期の春の田舎道の様子が手に取るように分る。無論これは花袋が何度も一帯を踏査した結果である。花袋は『田舎教師』について度々語っているが、『インキ壺』には『田舎教師』の日記や「踏査」の章において、小説の成立に關することが述べられる。『田舎教師』の日記（『インキ壺』明治42・43）には次のようにある。

『田舎教師』の主人公の書いた日記の中から天候と草花を記した処を抜いて見る。

七月二十九日 朝横様に降る雨にぬれて出勤、終日曇りつ晴れつ、時々大雨到る。△児童違約して白百合の花を持来らず。蓮の花咲きたりといへども未だ見ず。径七分ほどの青き柚子二つ貰ふ。日記書き居れば、かみきり虫

羽音高く飛び来る。△今朝うす色の朝顔二つ咲きぬ。

三十日 晴れて暑く八十五度、きんみつびきの花初めて見る。△歸りに植木店を見る。ちだりさう、ぢやこーなでしこありたれど価高ければ買はず。

卅一日 医師の庭に百合朝顔咲きたり。△晴れて八十四度、蒸暑し、午後一時驟雨来る。今朝朝顔の鉢を洗ふ。美しきが二輪、白ささぎ草も初めて咲きぬ。優なるかよわき花や、小さし小さし。

八月一日 二階の窓によれば野の朝の雲に清けきかゞやき見えて、勇しき夏の光は又栄え行かんとす、濃き緑のときはあけびの葉に露心地よし。△稲葉伸びて二尺、朝顔の美しきは五つ、ささぎ草の白さが三つ。△午後細雨、夕風涼し、心地よきかな金色もゆる夕日の雲。

三日 鉄道線路の西の森に散歩して野花を採る。えりころ、おひしば、ひよどりそー、こもつなぎ、なでしこ其他名の知れぬ草など。ひあふぎ、ききよふ、秋海棠を見る。

四日 朝より雨、午後に至りて全く晴れず、きんかんの花白う、秋風が、そよく肌にさはる。

五日 今朝早くより晴れて、秋風ふくらし木の葉の動きに見ゆ。日光の座敷に射し入る方向より考ふれば、太陽は少しく南に廻りたるやうなり、旧六月二十四日、日出午前四時五十一分、日入午後六時四十二分。

六日 此頃稲の葉伸びて、朝の野緑すが／＼しうなりぬ。
また同じ『インキ壺』の「踏査」の項目に次の様にある。

街道がある。其処に日が照る。人が通つて居る。向うには山の翠が見える。それは年々歳々同じである。秋が来れば稲が熟つて、里川に雑魚の泳ぐのが鮮かに見える。稲を満載した車がガラガラと音を立てゝ通つて行く。私は其処に一『田舎教師』の歩いて行く姿を明かに見た。

踏査——私はこの踏査といふことを地理学から学んだ。

日記よりも手紙、手紙よりも踏査の肝要なのを私は感じた。

歴史地理といふ学問は面白い学問である。私は小説地理といふことを『田舎教師』に由つて考へた。

私が小説製作上実在を尊ぶのは、決して消極的ではない。積極的である。史家が古城址をさぐり、地理学者が山嶽を踏査するのと同じ位に思つてゐる。

このように花袋は『田舎教師』執筆を通して小説の方法と立脚点を確立し、花袋独自の文学への道を開拓したと考えられる。

3

花袋の廃墟志向ということがよく言われる。また、死への親近も花袋文学に顕著である。廃墟や死にこそ慰藉と静穩があるという、一種の廃墟ユートピア観のような感懷が、明治の末近くなつた辺りから徐々に花袋文学の原動力となつていき、花袋のセンチメンリズムやリリシズムと相俟つて花袋文学の峰々を作り上げたと言えるのではないか。また、花袋の作家としての特権的觀察者意識は花袋自身を現実から切り離してしまふという、花袋のよく用いる「圏外」意識の寂しさ・驕りといった問題を惹起するだろうが、例えば『田舎教師』のような作品では、羽生や弥勒などの北関東の一地点を視座に据えて、東京や世界の動靜をも眺望し、小林秀三の目を通して羽生近辺の地誌から近代日本文壇の潮流までを探るといった、庶民の目による小説時空を実現することが出来た。それは近代化に翻弄されることばかりでたいした恩恵に与らない細民的人達の絵姿とでも言おうか。その小説時空にたゆたう近代の無常と失意は伝統的なもののはれにも似た感動となつて、日本近代の本質に衝迫していると見られる。さて、『田舎教師』はさまざまの方面から批評研究されてきたが、同時代批評で石川啄木は『巻煙草』（『スバル』明治43・1）で次の様に評価した。

四十二年の文壇で最も活動した人は誰かと見るに、その事実上に効果を残した点に於て矢張り田山氏と永井氏を第一に推さねばならぬ。

『妻』に表はされた田山氏の人生觀照の態度の案外幼稚な程度にあることは、材料の選択に基た不聰明で、從つて作を極度に冗漫ならしめた事や、主人公の性格の全く現はれてゐない事や、其心理的経過が頗る徹底してゐない

事などによつて略推^ほ断する事が出来る。それが「田舎教師」になつて来ると、作者との関係の無い事件を取扱つた所為もあらうが、仮令^{たとへ}ば他の作者なら省きさうな事柄を省かなかつたところにもそれ相應に見識が見え、従つて平面描写論を唱へるに至つた氏自身の理窟^{りく}以外の根拠も領^うかれた。そして、日露戦役といふ大舞台を背景にして、主人公の淋しく死んで行くところに、私は田・山氏の未だ何人にも公言しなかつた或る野心を見た。この野心を私は田・山氏に取つて正当なる且つ最良なる野心であると認める。細かく言つて来れば、我々も色々の欠点（一例を挙げれば読売新聞の指摘した、清三が肺病に罹つてからの生理的心理の状態を閑却した事など）を認めぬ訳には行かぬけれど、何しろ「田舎教師」一篇が明治四十二年が遺した重要な記念の一つである事は争はれない。

序^{ついで}だから言つて置くが、現時の批評家が此大作に対して纏まつた批評を一人も公にしなかつたといふ事は、現時の文学上批評を了解する上に忘れてはならぬ事実である。「努力の結果である、乃ち大作である。」といふやうな批評が、若し批評と言ひうるなら極めて無意義な批評といはねばならぬ。

花袋の試みが啄木の言うように「野心」であつたかは即断出来ないけれども、花袋の作意が『蒲団』や『生』より深化し、平凡な市井人の生死に光を当てながらも実は単なる一青年の空しい死の記録ではなく、さまざまの人生や大きな世界を無名な若者の小さな死が逆に包摂している、そのように一人の無名人の人生に一地方の自然と暮らしと、さらに文学史や世界史の動きまでも対比させ、無名で哀れな個人と世界的展開とをパスベクタイプする中にこの世の真実を深い感動と共に伝えている。そのような意味ではこの小説は花袋の野望というか、新生面を開いた作であることは間違いないだろう。林清三の人生はほとんど熊谷・行田・羽生・弥勒から出ることなく、わずか二十歳と少いで終つたわけ、まことに空しく区々たる人生であつた。しかし彼の心には二十世紀初頭の世界の動向が映り、学友や児童の生活と自然界の事象と、女郎屋の娼妓の客への手管までが反映していたのである。一つの例を挙げると、五十一章には南アフリカのトランスヴァール共和国の大統領「クルウゲル」の死について触れている。

七月十五日の日記にかれはかう書いた。

『杜国亡びてクルウゲル今又歿す。瑞西の山中にて肺に斃れたるかれの遺体は、故郷のかれが妻の側に葬らるべ

し。英雄の末路、言は陳腐なれど、事実は常に新たなり。英雄クルウゲル！ 元トランスヴァール共和国大統領ホル・クルウゲル歿す。歴史は常にかくの如し。』

この一段は初版本（復刻）に於ては「クルーゲル」「トランスヴァール」と表記に異同があるが、それはにおいて、この前段五十章は清三一家が行田から羽生に落ちぶれ果てた引越しをする場面などが描かれる。引越しは明治三十七年六月中旬の「農繁休暇」中である。その後に「クルウゲル」の記載がある。清三の「一家族の漂泊的生活」があつて、次に「英雄クルウゲル」の記述があるのはいかにも唐突のようだがそうとばかりは言えない。この一節が小林秀三の日記によるものなのか、若しくは花袋の創作なのかは明らかではない。日記の記載を花袋が補足的に引用したのかもしれない。兎も角Paulus Krugerというトランスヴァール共和国の政治家は明治三十七年七月十四日に亡命先のスイスで肺病の為に亡くなった。七十九歳という高齢であつた。現在では国の存在すら忘れられているが、トランスヴァール共和国は現南アフリカ共和国の北方に江戸時代末期の一八五二年から一九〇二年まで五十年間存在した、オランダ系移民のボーア人の国である。クリューガーはそこに生れ、独力で政治家になり、第一次ボーア戦争では侵略して来たイギリスを破り後に大統領になる。第二次ボーア戦争ではイギリスに破れ、スイスに亡命した。南アフリカの豊かな鉱物資源により、白人の移民国家が盛衰したわけだが、林清三の生きた時代にはアフリカの先住民族とその土地を白人が侵略・略奪することに対する罪悪視・侵略視の意識はなく、アフリカと言う新天地をめづつて、英雄豪傑が鎬を削る波乱万丈の冒険といった受け止め方をしたものでらう。七つの海を支配すると言われたイギリス軍を一度は破った英雄も遂に国を失くし、病には勝てず、亡命先で儂くなった。そういう世界的事実と羽生の陋屋で病勢が進行し、体重は二か月で七kgも減った林清三の全く歴史上に名を残さない人生と、そして更に遼東半島で激しい戦闘が続いており、死傷者は増え、花袋が『一兵卒』で書いたような死も増え続けているだろうことなどが、この地球上に同時に生起している。そのように羽生で病臥する清三の目や心を通して世界が見えるというのが近代の一つの特徴なのであろうが、だからといって世界に雄飛したり、英雄になったりする人物が特別な人生の意味や意義を持ち、凡人の人生とはかけ離れた価値を持つというわけではないのだ。それは五十章で引越した後、二階を書斎にして、荻生さんの持つてきた菖蒲を相馬焼の花

瓶に生けた。その時清三は荻生に対する気持を新たにして、『曾て此友を平凡に見しは、わが眼の発達せざりし為めのみ。荻生君に比すれば、われは甚だ世間を知らず、人情を解せず、小畑加藤を此友に比す、今にして初めて平凡の偉大なるを知る、』と日記に記したことからも知れる。羽生の郵便局員に自足する荻生を物足りなく思っていたのが、平凡であることは偉大なことであるように思い直した。これは自分と他人の比較とか、英雄と凡人の区別などは無意味である。人生における多少の毀譽褒貶、成功失敗などは大きな物差しで計れば誤差の範囲でしかないと観する、一つの悟りの境地に近い。だから「英雄の末路」と観じたわけで、英雄クルウゲルも清三も荻生も結局は似たようなものなのだという諦めなのである。それは結局凡人の悟りに過ぎないと言えよう。だが、『田舎教師』を生み出した行田や羽生・弥勒の土地柄とそこに拘って観察した花袋の抒情性は現在に至ってなお新鮮であることを考えれば単なる凡夫の負け惜しみの悟りとも言えないだろう。

『田舎教師』は「日本の世界的光榮の日」に滅びて行く青年の目を借りて、日本近代の「光榮」が万葉集以来の、人の暮らしと自然の調和への歌心と、同時に中世以来の日本文学の大きなコンテクストとなった無常観とを内包していることを死者の目に寄り添うことで示唆した、地方性文学の傑作であると言えよう。世の中の出来事には明るい世界の出来事と、その裏面に隠された暗部とがある。表面的に華やかに見える社会の裏には平凡でつまらない、さらにまた哀れで誰にも注目もされない無数の生死がある。その当たり前のことを微視的視点から徹底して描く時、『田舎教師』は単なる名もなき田舎の教員の短い生の記録を超え、『絶望と悲哀と寂寞とに堪へ得られるやうなまことなる生活を送れ。』『絶望と悲哀と寂寞とに堪へ得るゝ如き勇者たれ。』『運命に従ふものを勇者といふ。』（四十章）のような箴言を残した明治青年の個性と普遍性を形象することに成功したと言えよう。それはこの小説の主要な契機が寺と墓であることから明らかのように、近代日本の光榮が内包していた甚だしい不調和や矛盾、さらに深い処にあるべき無常観の近代的再認識であり、つまりこの世の出来事も煎じ詰めれば寺と墓に帰着するではないかという諦念なのである。花袋は日露戦争の最中に無為にして死んだ若者に焦点を合わせることで、近代日本の発展と戦争を相対化あるいは意図的ではないにせよ矮小化し、その果てにあるのは無常（死）と廃墟に過ぎないと観じた。それは日露戦争に取材した『一兵卒』に

おいても同様であった。また、人は誰しも林清三こと小林秀三のように哀れで無名の勇者であることも花袋的な真理であった。こうして見ると『生』において母親の終焉に密着した花袋は『田舎教師』で生者よりも死者に寄り添う傾向を顕著にし、廃墟や滅びに対する親近感を強めることで自己の立脚地や小説の構想力と原理を獲得したと言える。それは或る意味で花袋の戦略でもあったと思われ、繰り返すようだが自分は特権的立場を保持つづけることを前提にするもので、『蒲団』に於ける「圏外」者の悲哀よりも後退した地点に立つことでもある。『田舎教師』には主僧という太田玉茗と花袋自身が清三の目を通して描かれ、その他に大島孤月と言う名で大橋乙羽が間接に出て来る。『明星』最頁の清三に対して石川は「文壇照魔鏡」を送って寄越した。明治三十四年の夏、原杏花こと花袋は成願寺（建福寺）を『太陽』の記者相原健二（不明ながら斎藤紫白かと推測される）とともに訪ね、昼間から酒を飲み、ふざけて木魚を叩く。清三は『文学者なんて言ふものは存外暢気な無邪気なものだねえ。』と友人に言い、羨ましく思う。このような特権的な自由人としての文壇人の様子を清三の目から描くことは、花袋自身がそう思われることを期待し容認していることの表れとも言える。作家は特権者なのか、人生の従軍記者たり得るのかといった問題にも通じるが、文学者は暢気・無邪気ではあり得ず、外からは分らない爬羅剔抉の苦闘をしているのだという苦闘の顔を見せないため、小説全体として掘り下げが足りないことは否めない。そうした平板さはあるにしても、また文字通りの平面描写的叙述は焦点が拡散する気味はあるものの、にもかかわらず『田舎教師』は近代日本の基層的な田舎の有り様を活写し、二十歳そこで死んだ青年教師に密着し、「悠々たる人生」を描出した点で他に類を見ない小説である。

注

(1) 田中榮一「島崎藤村「春」と花袋「田舎教師」」(『日本近代文学』昭和57・10、『日本近代文学考(上)』平成26、編集工房K I Z N A)に両作の叙述態度についての詳しい考察がある。

(2) この主人公の音楽学校の受験のことはやはり事実であった。同僚であった速水氏の話を経合して見ると、始め赴任した時「音楽」は大島つまり大塚氏が担当していたが、後に秀三(清三)がかわってやるようになった。秀三(清三)は作詞し、オルガ

ンもひくので大塚氏が自分で進んで頼んだ。そんなことから大竹玉堂という人にすすめられ上野の音楽学校をうけたのである。第一日の作文は「何故音楽学校を志望したか」であった。これは無事通過したが二日目の実科の時、前の晩遊びすぎて八時開始の試験に八時十五分頃起き慌てて駆けつけた時は、受験生は一人位しか残って居らず大変気が落つかず何も出来なかった。帰って来て速水氏に「人には言えないよ」と語ったというのが事実の様である。(小林一郎『増補田山花袋 小説家としての田山花袋』創研社、昭和44・1) 参照。

- (3) 勝又正直「地図の上の主体——田山花袋作『田舎教師』を読む——」(日本社会学会『社会学評論』平成10・6)には次のような論考がある。

明治40年(1907)に花袋は『一兵卒』という短編を書いている(発表は『早稲田文学』明治41年1月号)。この作品は、日露戦争に従軍しながらも遼陽攻撃という決定的な場面に加わることもなく、脚氣衝心でひとり死んでいく一兵卒を描いたものである。

「かれは歩き出した」(田山1972:86)、(田山1972:86)「は岩波文庫『蒲団・一兵卒』である。

この小説でも主人公「かれ」は歩いている。野戦病院をひとり出て、本隊に追いついて遼陽の攻撃に参加しようと、「かれ」は歩く。しかし途中の村で脚氣衝心で死ぬ。

作品の構造は簡単である。野戦病院から遼陽へ地図のうえで線を引く。その線の上を「かれ」が歩いている。この地理的な線の上を歩く彼の歩行によって小説のなかの空間と時間がまとめられ、小説のなかの描写は生まれる。つまり主人公の目的地への移動が小説の空間と時間をまとめるやり方である。

主人公「かれ」は遼陽攻撃という日露戦争のハイライトとでもいうべき場面で兵隊として活躍するのでなく、それをめざしながらもその途上で死ぬ「かれ」。

こうしてみるとまるで畑違いの作品にみえる『田舎教師』と『一兵卒』はじつは同じ構造をもっていることがわかる。

- (4) 単行本の振り仮名は「ゐいづみむら」となっているが、その他の箇所では「ゐづみ」となっている。

- (5) 『秋の寺日記』(『文章世界』明治41・11)にも似たような記述がある。

墓場に一基の自然石の墓がある。

『――之墓』と正面に書いてあつて、下に生前辱知と刻んである。これが私が『田舎教師』に書かうとする主人公だ。其主人公には、私は七八年前、此寺に來た時に逢つたことがある。頭髮を分けた瘦削の人であつたやうに記憶して居る。中学校を出てから、家庭の都合で、この近在に小学校の先生をして居た。其頃、此寺の本堂の一間を借りて自炊して居たのである。かれが肺病で斃れたのは、日露戦争の遼陽占領の前後であつた。私は其後其人の死を聞き、其人の哀れむべき志を主僧から聞いたが、まだ其頃は書かうとも何とも思つてゐなかつた。処が、ある年の秋も暮れて、木枯の寒く吹く日、私は停車場から其墓場の近路を抜けて寺に來た。不図其墓が目についた。何うした加減か、『かうして年若く死んで墓に築かれて了ふ人もあるのだ』と思つた。胸があるものに触れたやうな氣が爲た。

『親々と子供』の最後のハザロフの墓の処の一頁が歴史と眼に浮んだ。平凡なる一田舎教師の死！

これに意味が無いだらうか。

補足、ツルゲネフの『父と子』を昇曙夢訳で挙げておく。

『父と子』の末尾を次に掲げる。

ロシアの遙か遠い一隅に、さる村の小さい墓地がある。我國の墓地は殆んど皆さうであるが、この墓地も如何にも淋しい光景である。墓地の周囲にある溝には、もう疾くから草が一杯に生え繁つてゐる。灰色の木造の十字架は俯向けになつていつか、塗られた屋根の下で朽ち果てゝゐる。石造の墓標は、丁度誰か後方から押しでもしたかのやうに、どれもこれも皆ずれてゐる。二、三本の抜けかゝつた木が、僅かに貧弱な木影を作つてゐるに過ぎない。羊の群が悠々と墓の上を彷徨してゐる……然し、その中にたつた一つだけ人間の手も触れなければ、動物の足にも踏みつけられない墓がある。たゞ小鳥がその上に止つて、暁の歌を唄ふだけである。その周囲には鉄柵が巡らされてゐる。二本の小さい樅の木が、鉄柵の両端に植つてゐる。この墓の中にエヴゲーニイ・バザーロフが葬られてゐるのである。程遠からぬ村から、もうよばくになつた二人の老人が――夫とその妻とが、々この墓を訪れる。彼等はお互に援け合ひながら、重々しい足どりで歩いて来る。長い間ぢつと、自分の息子の上に横たはつてゐる無言の墓石を見つめてゐる。

補足、花袋は回想的に次の様に書いている。

『田舎教師』を書いた時』（『長篇小説の研究』（芸術研究叢書第四編）新詩壇社、大正14・11）

ゾラには例の試験小説の目がある。かれは一々その書かうとするものについて研究した。否、研究したといふだけでは足りないといふので、それを試験した。鉱山に、鉄道に、兵營に。つまりかれはかうもあらうかといふイリユウジョンをその実際の場所へ持つて行つて置いて見たのである。だから、かれの書いたものは、ある点までは写生である。鉱山は鉱山として飲み込まれるやうに、鉄道は鉄道として飲み込まれるやうに書かれてある。しかしそれは、その写生は外部のことだけであつて、一度その内部に入ると、全く好い加減である。わるく作者が拵へてゐる。かうふことがあり得ないとは言へない——あるかも知れない。あるかも知れない書いても好いわけである。かういふ風にかれは思つてゐる。しかし前にも度々言つたやうに、自然はさう容易く見透かされない。かうだからかうといふ風には言へない。だから、ゾラの試験小説の目も最後には問題にされなくなつてゐる。（中略）

私は見ることから始めた。何事でもそれを本当に理解するためには、何うしてもはつきりと見ることから始めなければならないと思つたからである。私は手近いところから見て行つた。人間は自分の親とか兄弟とか伯父とか伯母とか、更に妻とかいふ方面から。またいろいろにわけられた商売から。役人から。そこらにゐる人達から。電車の中にゐる女達から。しかし見るといふことはさう簡単に出来るものではないといふことが次第に自分にもわかつて来た。また見てわかつたと思つたことが本当にわかつたのではなくて、自分がさういふ見方をしてゐるがためにさう見えたのだといふことも飲み込めて来た。いつも打突るものに私はそこでも打突つたのである。

私は『田舎教師』の準備をした時のことをくり返した。私がそのヒントを得たのはその寺のその墓の前に立つた時であつたが、ツルゲネフの『親々と子供』の最後の一章などを思ひ出して、若くつて死んだ人の未死の魂などを思ひ浮べたが、しかも本当にそれを書かうと思つたは、戦地から歸つて来て、その人の一二年間の日記を読むことの機会を得てからであつた。私は何遍となくその田舎に行つた。その男の寓してゐた寺に行つた。その日記に書いてある野にも町にも行つた。最後には死んだその家にも行つた。その父母にも逢つた。かれのつとめてゐた田舎の学校に行つて、その校長に逢つて、その話をきかうとし

た時などには、わるく危険人物視されて、滅多なことは話されないといふ風に取扱はれたことを覚えてゐる。そればかりではない。私はその小学校教師の通つた田舎道を五度も六度も歩いて見た。しかしそれはゾラの所謂『試験』的にスタディしたわけではない。それよりむしろ直接にその小学校教師その人の気持になりたいと思つたのである。その主人公の気持になり得ればなり得られるだけそれを書く心持が本当になつて来ると思つたからである。日記を見ただけでも書けば書けるが、それよりも確かにそこに行つて見れば、その当人ではないにしても、その当人の味はつた心持に近い心持を味はつて来ることが出来ると思つたからである。ゾラのやつたやうな外物写生も大切だが、それ以上にその主人公の内部まで肉薄して行きたいと思つたのである。

補足

岩永胖『田山花袋研究』（白楊社、昭和31・4）『『自然主義文学』における虚構の可能性』（桜楓社、昭和43・10）に『田舎教師』の事実関係について詳しい論述があるが、この度は日記の細部まで検討できなかった。

『田舎教師』の本文は『定本花袋全集第二巻』（昭和11、復刻版 平成5）を用いたが、随時佐久良書房刊行の単行本を参照した。句読点などは全集表記の疑問点を単行本によつて改めた。